

竹磇詩詞文拾遺 附鷗夢樓詩集題詞及序

萩原正樹

森川竹磇（名鍵藏、字雲卿、號鬢絲禪侶）の詩詞文集『得聞集』（二卷一冊、鷗夢吟社、明治二十四年）、『聽秋仙館詩稿』（二卷、森川竹磇遺稿刊行會、一九六七）と『夢餘稿詞集』（二卷、國際藝術文化交流委員會、一九八九）に未收録の作品について、筆者はこれまで、「竹磇若年の詩詞文—集外詩詞四十九首及び佚文五篇—」（「風絮」第三號所收、二〇〇七）では雑誌「慕竹新篇」「海內詩媒」「鷗夢新誌」から詩詞文計五十四篇を拾い、また前稿「竹磇詩詞文續補遺」（「學林」第四十五號所收、二〇〇七）においては、「鷗夢新誌」第四十八集（明治二十三年一月刊）以前より計六十八篇を補つてきた。ただその際、「鷗夢新誌」第七から第九集および第二十七集、第四十四集については、未見のままであった。ところが最近、幸運にもこの未見であった五冊及びこれまでその存在を知られていなかつた「鷗夢新誌」號外を入手し、さらに「螢雪學庭志叢」という雑誌にも竹磇の詩文が收録されていることを發見し、新たな作品として文三篇、詩三十首（重複分一首を除く）と詞四闋の計三十七篇を得ることができた。

「鷗夢新誌」號外は、明治十八年十二月二十五日刊行、表紙一葉と

溝口桂巖の「題言」一葉を含めると全十五葉である。表紙には「印刷以代謄寫」とあり、また「禁賣買」と記されている。表紙裏の「目次」には「文苑拾芳」として文五首の題目、「詩歌採英」として「古詩四首」「排律壹首」「律詩拾首」「絕句廿三首」「和歌六首」が見え、さらに「質疑應答」の項も存している。この構成は第一集とほぼ同じであるが、「詩歌採英」の部分に、第一集からは連載される「鬪詩」欄が見えないのは、號外發行時點ではまだ課題も讀者に知られておらず、應募者もいないのであるから當然であろう。號外の末葉に次回の課題として「冬至梅（七言律限真韻）十二月廿五日限」「早春（七言絕句）一月二十日限」と掲げられ、後の第一集では「冬至梅」が、また第二集では「早春」の作品が「鬪詩」欄に錄されている。

「目次」の下部に「例言」があることも第一集以降と同じだが、號外の「例言」は四則で、第一集中見える第五則「此篇評閱、係于馬杉雲外先生一手」という文言が見えない。これは、當時はまだ編集の方針が確定していなかつたことに據るのかもしれない。號外においても雲外の評が最も多いが、大沼枕山、森槐南、また清・胡秉卿の評語も

附されている。

末尾の刊記には、「發行所 東京牛込區白銀町三十一番地 鷗夢吟社」とあり、編輯人は第一集と同じ野間金五郎、幹事として中川周春、藤澤謙之助、田中武恭の名が連なっている。また補助の欄には、森川竹磇、篠崎柳園、磯部蒼岐の名が見える。

このような號外が發行された經緯について、號外の「社告」には次のように述べられている。

本誌發行ノ義願置候處未ダ許可不相成候ニ附本月一回ハ號外ヲ以テ發刊ス尤モ來一月發刊迄ニハ必ズ許可相成ベク候間諸君幸ニ諒セラレヨ

すなわち、まだ「許可」が下りていないので號外を發刊したが、翌一月には「許可」が下りる見込みであるという。この「許可」が何處からの何の許可を指すのか、詳細は不明であるが、あるいは明治八年六月に太政官より布告された「新聞紙條例」による出版認可である可能性も考えられる。⁽¹⁾ いずれにしても、正式な認可前に、「禁賣買」と標榜しつつも雑誌を同好の士に配布していたことは、非常に興味深く思われる。

「螢雪學庭志叢」は、明治十四年十一月に號外、翌十二月に第一號が刊行され、以後おおむね月に二回の頻度で發行されている。終刊が何號であるかは今のところ不明であるが、現在確認できる最も遅い號

は明治二十四年十二月刊の第二二三號である⁽²⁾。發行所は有終社、卷頭に漱村市川光範の題詞が掲げられており、眉批にも漱村の名が多く見え、さらに「鬪詩」の批點者が漱村であるなど、市川漱村とその門下を中心とした雑誌であった。なお特務社員には、竹磇の友人であった三好瘦石の名が見えている。

今回調査したのは、號外から第七號、第九號から一七〇號、一七三號、一七六號から一九五號、一九七號から二一〇號と二二三號の計二〇六冊であるが、この中から竹磇の文三篇と詩二十首を拾うことができた。作品以外にも、「螢雪學庭志叢」には、竹磇の評語や雑誌「葢竹新篇」「鷗夢新誌」の廣告、個人弘報などが掲載されており、竹磇の動向を知る上で貴重な資料となっている。

竹磇の詩集未收の作品は、なお「海內詩媒」や「螢雪學庭志叢」の未調査分、またその他の雑誌などにも載録されている可能性がある。ただ、竹磇が主宰した雑誌「鷗夢新誌」掲載分に關しては、幸いに號外も含めてほぼ拾うことができた。そこで今回は、前稿までに未見であつた「鷗夢新誌」第七から第九集、第二十七集、第四十四集と號外から得た詩詞計十五篇と、「螢雪學庭志叢」所收の詩文二十三篇（うち詩一首は題目のみ掲げる）とを紹介することとした。また、あわせて竹磇の初期詩集である「鷗夢樓詩集」（未刊）の題詞及び序文を錄し、後考に備えておく。

「鷗夢新誌」所收詩詞

〔詩十一首〕

○送澤一舟赴相州橫須賀（「鷗夢新誌」號外、明治十八年十二月）

風霜凜凜西又東、木葉落盡一望空。
河梁送君何限意、臨別欲語恨無窮。
雖非人間無哀淚、丈夫何敢倣女子。
山海隔離君莫忘、同臭余欲俱生死。
誰言東都地更好、世態慘侈乏人倫。
唯願努力勿害身、君幸自愛土風新。
嗚呼從今與誰語、俄然今日失舊侶。
二五年來交誼明、一朝相別何破盟。
他日相見廟堂上、不願吟詠終斯生。
墨堤之櫻品海月、與誰游賞聳吟骨。
墨江之雪二橋涼、與誰對酌盡心腸。
驛馬嘶風聲切切、別酒酌盡情難竭。
勸君一杯餞別離、不用啾唧費饒舌。
欲別牽衣更添愁、此行休比長江流。
西東余唯期再會、人生聚散似雲浮。
囑君他日有得詩、郵筒寄贈慰孤憂。
報君浙浙寒風夕、海月添光照吟魄。
君不見河梁攜手分手後、故人各在天涯。
江心波浪往又返、不知遇君在何時。

雁聲蕭蕭雲漫漫、海天何邊寄所思。

○詠松竹梅、賀寺島玄石古稀、爲其囑（「鷗夢新誌」第七集、明治十九年七月）

不改舊時容、蟠根似臥龍。
仙鶴栖其頂、青綠千歲濃。
梅竹好相伴、勁節傲嚴冬。

嘗自產淇澳、萬竿青矗矗。
虛心見堅貞、秀氣雪中蓄。
龍孫勢凌天、莫是鳳凰宿。

清標絕點埃、香魂與春回。
冰肌又玉骨、老幹帶蒼苔。
本是仙山種、豈唯百花魁。

○次森本沖洲記感似在京諸友詩韻、却寄（沖洲頃者、赴任在相州橫須賀）（「鷗夢新誌」第七集、明治十九年七月）

春光老去詩思顛、榴花百百又千千。
杜宇聲中微雨冷、懶上高樓賦新篇。
羨君青年聞見博、笑吾菲才蒲質弱。
試問君今何所樂、海天遙望雲漠漠。

○採蓮曲（「鷗夢新誌」第八集、明治十九年八月）

蓮花芳。蓮花芳。亭亭帶露凝淡妝。

恍然人在珠簾裡、風送清香入閨房。

日暮手攜合歡扇、悄立池塘迎月見。

月色皎皎白於霜、照來奇觀一段變。

憶昔郎君清涼夕、畫舫攜妾意清適。

今也一別如三秋、郎君去爲他鄉客。

思之思之更添愁、俄然浮得舊畫舟。

採蓮採蓮蓮亦好、一碧青空一天秋。

忽想郎君在何處、滿腔悲懷向誰語。

秋風清。秋月明。

露有輝、葉有聲。

郎君今宵爲底事、妾也採蓮多愁思。

蓮花芳。蓮花芳。採蓮採蓮轉斷腸。

葉上露溢紅裳濕、葉底驚飛雙鳶鴛。

夜深池上採蓮止、月色嬋娟觀愈美。

追想往時不能忘、不知郎君思妾否。

烏雲不整寶釵斜、爭奈紅恨亂如麻。

近來自覺冰肌瘦、也似蘇小門外柳。

蓮花芳。蓮花芳。幽姿恰似翻霓裳。

對之如何不思郎。風如迎、月如送。欲歸不歸心自痛。

四隣蕭蕭夜已深、草蟲唧唧微冷侵。

手把蓮花香穿鼻、此際難忘郎君事。
濕裳玉露猶未晞、況又悲淚滴羅衣。

風颯颯、月瓏瓏。回頭月照白與紅。
羨殺芙蕖仍竝蒂、夜深同浴一池中。

○春水生（「鷗夢新誌」第二十七集、明治二十一年三月）

春到江東第幾橋、伊人何在水迢迢。

相思書寫千行淚、欲寄去來潮又潮。

○春曉（「鷗夢新誌」第二十七集、明治二十一年三月）

誰寫銷魂上彩箋、夜來一夢迹茫然。

梨花院落春猶冷、楊柳樓臺水欲烟。

綺語瑤情才子賦、烏絲红豆美人緣。

呢喃相話雕梁燕、驚破吾儂尙懶眠。

○送宮崎晴瀾歸土佐、次其留別韻（「鷗夢新誌」第四十四集、明治二十

二年九月）

商飈乍起拂衣巾、行李蕭然羈旅身。

暫別豈無沾袖泪、遠歸未必倦游人。

小湖楊柳管絃地、墨水鷺花羅綺塵。

佳句奚囊收拾得、高吟也好出城闈。

滿腔忼慨與誰譚、更有閒情不可堪。

看劍鐸前浮白大、賦詩月下疊歌三。

節須壯士筑先擊、才是美人禪足參。

初志未全違客裏、又追雁雨向天南。

燭影重行酒幾過、佳賓在座奈愁何。
定知駐馬古堪吊、如見讀碑苔自摩。
鐵版一聲游子泪、陽關三疊雪兒歌。
佗時有約相逢處、南海風光題遍多。

〔詞四闋〕

○極相思（「鷗夢新誌」第八集、明治十九年八月）

本意

深閨畫靜魂賒。辜負好韶華。淚珠難絕、欄干一角、情緒如麻。

人遠花飛春也盡、趁黃昏弄笛誰家。雨潛梅子、風吹柳絮、愁絕天涯。

○點絳脣（「鷗夢新誌」第四十四集、明治二十二年九月）

湖上夜歸

月氣惺忪、一風吹作聲悽楚。箇中秋趣。鄙似蓮心苦。

漠漠新涼、香遠煙迷渚。眠鷗鷺。夜深沈處。閒夢能成否。

○長相思（「鷗夢新誌」第四十四集、明治二十二年九月）

風瀟瀟。雨瀟瀟。小海棠魂不可招。芙蓉一樣顛。

思迢迢。夢迢迢。一縷香煙與酒消。新寒透碧綃。

○轉應曲（「鷗夢新誌」第四十四集、明治二十二年九月）

促織。促織。聲在床邊轉急。金鳴烟燼沈香。鐙影迷離夜長。長夜。長

夜。數盡丁丁漏也。

附記：上掲の詞四闋は、神田喜一郎博士『日本における中國文學II』（『神田喜一郎全集』第七卷所收、同朋舍出版、一九八六）にも引用されて
いる。また張珍懷箋注、施議對審訂『日本三家詞箋注』（澳門中華詩詞
學會、二〇〇三）所收の「竹槻詞」には、「點絳脣」「轉應曲」の二闋
が載録されている。

「螢雪學庭志叢」所收詩文

〔文三篇〕

○學而時習說（「螢雪學庭志叢」第九十號、明治十八年九月二十五日）

人性善也。不受教而全性善者、聖也。受教而全性善者、賢也。雖受教
而不能全性善者、愚也。孔子曰、學而時習之。不亦說乎。何者人性善。
欲明善而全其性、則學而後能得之矣。若天苦其難而不學者、是自棄也。
學而時時溫習之、則性與理會。故曰不亦說乎。

○非蘇子瞻續楚語論（「螢雪學庭志叢」第九十四號、明治十八年十一月
二十五日）

屈到嗜芰、臨終召其宗老、而屬之曰、祭我必以芰。及祥祭、宗老將薦
芰、屈建命去之。蘇子瞻曰、屈到身爲正卿、死不爲民。而口腹是憂、
其爲陋亦甚矣。甚矣哉、蘇子之愚也。語曰、三年無改父之道、可謂孝

矣。夫子木背父絕命之言、非不孝而何。假令屈到之言不可、豈忍於去之哉。禮曰、祭之日、思其所樂、思其所嗜、是人子之心也。而子木命去芰、其心思果如何乎。是人之子之所不忍。而子木忍之、可不謂不孝哉。且子木非父之言而去之、則顯其惡也。是亦人子之所不忍。而子木忍之、可不謂不孝哉。嗚呼、子木背禮也。不待喋喋之辯而知焉。甚矣哉、蘇子之愚也。

○月喻（「蟹雪學庭志叢」第一〇〇號、明治十九年二月二十五日）

無雲則清光嬋娟、如水如冰、莫毫末不辨焉。有雲則宇宙暗淡、不能辨咫尺焉。余有大所感也。夫月也者、可以喻人性歟。人性本善、苟爲利欲失其性、將亡國破家。然一旦求諸己而反於其本、則無破亡之患矣。何則性也者、我非求之而得之、我固有之也。由是言之、人性公明、猶月之無雲也。失之則暗淡、猶月之有雲也。嗚呼天下之人見此月而求諸其身、則庶幾乎其不差矣。

〔詩二十首〕

○春日偶成（「蟹雪學庭志叢」第七十五號、明治十八年二月十日）

鶯語綿蠻西又東、梅花馥郁白兼紅。

高樓有酒探詩處、吟醉魂飄春苑風。

○春曉^⑤（「蟹雪學庭志叢」第七十七號、明治十八年三月十日）

春眠心最快、帳底鶯黃鸝。

開窗天未曙、月宿杏花枝。

○春宵步月^⑥（「蟹雪學庭志叢」第七十九號、明治十八年四月十日）
天有月輪地有花、春來飽領月中花。
花乎月也眞吾友、臨月斜邊惜落花。

○落花^⑦（「蟹雪學庭志叢」第八十二號、明治十八年五月二十五日）
紅紅白白點青苔、瘦蝶猶踵瘦客來。
終日問花花不答、爲誰零落爲誰開。

○吊內山松堂姊（「蟹雪學庭志叢」第八十五號、明治十八年七月十日）

逝矣招魂淚濕衣、傷君永別竟無期。
南風何事轉狼藉、吹折垂楊柔一枝。

○詠竹（「蟹雪學庭志叢」第八十八號、明治十八年八月二十五日）

七賢六逸愛清貞、于世長留知己名。

明月照時窗紙畫、冷風飄處佩環鳴。
不唯高節傲霜雪、猶是虛心堪雨霽。
多少杏桃凡俗耳、漫誇花氣一時榮。

○秋日過古戰場。澤一舟席上分韻、得日字。（「蟹雪學庭志叢」第九十

一號、明治十八年十月十日）

鴻雁乘秋飛遼遠、滿山落葉風蕭瑟。
至此地有殘戈、追想往時紛戰日。

○中秋觀月（「螢雪學庭志叢」第九十二號、明治十八年十月二十五日）

待月月登東嶺巔、清光如水十分圓。
風磨雨洗潔尤潔 地闊天高娟更娟。
愛此江樓幽客會、勝他金屋美人筵。
吟詩達曙君休去、一墜西山又隔年。

○賦得萬戶搗衣聲（「螢雪學庭志叢」第九十四號、明治十八年十一月二十五日）

木葉正零落、江邊秋復深。
娟娟明月照、颯颯勁風侵。
已破征人夢、却摧少婦心。
冷蛩寒雁外、別有此哀音。

○新年作（原五節一）（「螢雪學庭志叢」第九十八號、明治十九年一月二十五日）

車馬冒寒朝九宮、不如爐底寄斯躬。
風吹上苑雖非勁、水結御溝猶未融。
清鶴一聲祥氣遍、驚鴉數點曙光通。
三杯椒酒酬慈母、春在千門萬戶中。（結用唐句）

○林和靖觀梅圖（「螢雪學庭志叢」第一〇二號、明治十九年三月二十五日）（「海內詩媒」第八十集に再録）

詩は省略

○新秋雨夜（「螢雪學庭志叢」第一一四號、明治十九年十月十日）

暑往涼來夏已過、自今詩興屬誰家。
梧桐葉落夜將永、蟋蟀聲高秋更譁。
一點燈殘感情動、三更酒醒斷魂多。
此中吾亦牽長恨、悽雨慘風驅睡魔。

○春曉（「螢雪學庭志叢」第一二三號、明治二十年三月二十五日）

曉梢風度葉狼藉、林外帶霜殘月白。
寒雁鳴過影作文、多情奈此青衿客。

○題春江花月夜卷子二首（「螢雪學庭志叢」第一二六號、明治二十年五月十日）

十里長堤花滿枝、模糊一白月光奇。
千金夜景春無恙、對酒誰題本事詩。
長江漱灑萬花嬌、何處佳人弄玉簫。
魂冷夢香洲畔月、不堪重賦可憐宵。

〔鷗夢樓詩集題詞及序〕

※作品の末尾に馬杉雲外と森川竹磇の評語も附す。

○竹磇詩集題詞（「鷗夢新誌」第六集、明治十九年六月）

磊落詩名四海鳴、招魂廟畔結同盟。
白鷗一夢間天地、翠竹三竿舊性情。

三好瘦石（名鐘）

綠水溶溶漲曲江、路泥三尺不堪筇。
野梅黃處喧群雀、門柳暗邊吠小尨。
俗客不來松下屋、幽人空掩竹間窗。
遠鐘聲裡日將暮、戰雨芭蕉翠影濃。

○絕句（「蟹雪學庭志叢」第一三〇號、明治二十年七月十日）

明月玲瓏無片雲、金爐炷盡麝蘭薰。
美人何處茉莉曲、聲入翠珠簾裏聞。

○冬夜月 同耕石、竹香、竹所、柳磇四子賦。得語韻。（「蟹雪學庭志

叢」第一三九號、明治二十年十二月十日）

如欲眠蠶慵私語、興懷幾度嘆齟齬。

栖鴉無影雪殘蘆、斷雁有聲霜滿渚。

詩酒今宵伴筆箋、江山何處望吳楚。

定知一棹曲江舟、孤客魂銷奈愁緒。

○竹磇詩集序（「鷗夢新誌」第八集、明治十九年八月）

磇部蒼帷（名武者五郎）

天下多愛竹者、而得其真者少。曰虛心、曰貞幹、曰高節、曰扶疏。是皆其外相也。以是愛竹乎。虛心高節之物多于天下、何必唯竹爲然。然得其真也甚難矣。風晨月夕、靜對竹而泊然澹然、深有默契者、可以得其真。此非局促塵界者之所能知、又非放漫豪譏者之所能悟也。友人森川雲卿詩才超越、夙登吟壇、名流江湖。性深愛竹、竹磇之號由之云。然其所愛在虛心高節之外相歟、抑有得其真歟。余與雲卿交久。相會也談詩論文、如高山流水、如光風霽月、是雲卿之所得於竹也。余嘗竊徵

之雲卿之詩、溫雅如玉、雄渾如龍、其聲如羅陵頻伽之起於碧空。乃知雲卿不局促塵界、又無放漫豪譸之病。而溫柔敦厚得眞之爲眞、以至於此也。然則其所得於竹者、蓋明矣。頃日、雲卿示詩集、以需余序。余性鶩下、復何一言。聊敍所思、以塞責云。明治十九年、七月初一日、蒼峯磯部武撰。

雲外云、裏玉篩金者、竹也。吞雨吐雲者、筆也。竹也者、可截作筆焉。筆也者、可把作文焉。有竹而有筆、有筆而有文。竹之與筆、筆之與文、同種同氣。賈生云、同明相照、同類相求。余於是序而知焉。

竹磯云、以竹起、以竹結。文章自有鏗鏘之音矣、眞得余意。

○竹磯詩集題詞（「鷗夢新誌」第十一集、明治十九年十一月）

岡田昆陽（名鐸郎）

不羨官門富貴榮、詞壇到處播才名。

尋花東里春吹笛、賞月南坡夜弄箏。

性比七才殊覺勝、詩兼三體別看精。

把君吟稿讀三復、處處風光篇裡橫。

雲外云、纖巧感人、非得竹磯平素不能也。

○鷗夢樓詩集序（「鷗夢新誌」第十五集、明治二十年三月）

內山松堂（名耕三郎）

雲外云、余與竹磯交非一日、而未嘗得聞吹笛彈箏也。願得陪他時花月之游、聞竹磯吹彈。

○竹磯詩集題詞（原三節二）（「鷗夢新誌」第十二集、明治十九年十二月）

平田耕石（名錄三郎）

雲外云、纖巧感人、非得竹磯平素不能也。

之雲卿之詩、溫雅如玉、雄渾如龍、其聲如羅陵頻伽之起於碧空。乃知雲卿不局促塵界、又無放漫豪譸之病。而溫柔敦厚得眞之爲眞、以至於此也。然則其所得於竹者、蓋明矣。頃日、雲卿示詩集、以需余序。余性鶩下、復何一言。聊敍所思、以塞責云。明治十九年、七月初一日、蒼峯磯部武撰。

推敲果是格調殊、壓世佳篇悉瑾瑜。

澹雅風流韋與柳、悠揚氣概白兼蘇。

登樓會友興偏豁、結社訂交歡不孤。

試取君詩比庭樹、長松秀竹又高梧。

雲外云、格調高雅、語意逼眞。是可以題竹磯詩集也。

竹磯云、拙著得此佳題、更生萬丈之光焰。

詩人情與俗情殊、朝詠暮吟心快乎。

滿架圖書閑富貴、一庭竹樹別寰區。

看花烹茶真幽味、坐月焚香亦靜娛。

料識此中多好句、皕餘篇是皕餘珠。

雲外云、簡潔秀麗、柑肉柑皮之喻尤妙。

森川雲卿云、諸友之序文及題詞、或以竹、或以鷗、唯此序以柑爲喻、獨出于人意表。

○鷗夢樓詩集題詞三首之一（「鷗夢新誌」第十六集、明治二十年四月）

平田耕石（名鉢三郎）

擲却塵懷俗累無、春山秋水儘操觚。
滿牀書帙珍而美、幾卷詩篇約不蕪。
脩竹古松移倚石、早梅寒菊伴烹茶。
清閑端坐吟哦處、匹似白鷗浮綠湖。

雲外云、奇巧之筆寫奇巧之趣、使人想望竹磇詩集之奇巧。

生前に刊行された竹磇の詩文集は『得聞集』（二巻）のみであつて、そこには一部の作品を除き、竹磇二十二歳（明治二十三年、一八九〇）から二十三歳までの作品が收められている。ただ『得聞集』編纂以前にも、それまでの篇章を一冊にまとめる意志はあつたようで、それが『鷗夢樓詩集』であり、現在知り得るところでは竹磇最初期の作品集となる。

右の題詞と序文に據ると、『鷗夢樓詩集』はおおむね明治二十年以前には、ただ單に『竹磇詩集』と稱されていたらしい。『鷗夢樓詩集』の名が見えるのは、明治二十年三月刊「鷗夢新誌」第十五集所收の内

山松堂の序文からである。

竹磇は、自ら編集した詩集を友人たちに見せ、序文や題詞を乞うていたのであろう。明治十九年七月の署名のある磇部蒼峯の序文、また内山松堂の序文も竹磇が求めたものであつた。最も早い題詞の作者である三好瘦石をはじめ、蒼峯、松堂、岡田昆陽、平田耕石いずれも竹磇とほぼ同年輩の人物である。彼らに閲覧してもらううちに、『鷗夢樓詩集』という書名も固まってきたのではないだろうか。年齢も近く親しく平生を知る者からの題詞であるためか、岡田昆陽の詩に「尋花東里春吹笛、賞月南坡夜弄箏」と詠じ、それが竹磇の師である馬杉雲外の知らない一面であったようで「余與竹磇交非一日、而未嘗得聞吹笛彈箏也。願得陪他時花月之游聞竹磇吹彈」と評しているのが面白い。だが『鷗夢樓詩集』は、ついに公刊されることなく、友人たちの題詞や序文とともに筐底に祕されていたのである。竹磇自身が「鷗夢新誌」第十九集（明治二十年七月）の「弘報」欄に、

候也

丁亥七月

森川竹磇拜

と述べているように、『鷗夢樓詩集』は舊作の整理保存のために編集

したもので、もともと出版は計画されていなかつたのであろう。

現在、『鷗夢樓詩集』の具體的な内容については知ることができないが、平田耕石の題詞（「鷗夢新誌」第十二集所收の第二首）に「皕餘篇是皕餘珠」とあり、また内山松堂の序文に「頃日雲卿編平生所作之詩二百餘首、名曰鷗夢樓詩集」と記されている如く、『鷗夢樓詩集』には二百餘篇の作品が收録されていたようである。筆者がこれまでに輯めたのは、「竹穉若年の詩詞文一集外詩詞四十九首及び佚文五篇」—で詩四十六首・詞三闋・文五篇、「竹穉詩詞文續補遺」では詩四十一首・詞二十六闋・文一篇、それに本稿の詩三十首と詞四闋、文三篇を加えると合計で詩一一七首・詞三十三闋・文九篇であるが、『鷗夢樓詩集』と題する以上文章は收載しないのが通例であろうから詩詞合わせて一五〇首となり、やつと七割を超えた程度に過ぎないことが分かる。すなわち、竹穉の初期作品はなお五〇首餘りが未發見なのであり、今後も可能な限り、その搜求につとめていきたい。

註

- (1) 「新聞紙条例」第一条に「凡ソ新聞紙及時々ニ刷出スル雑誌・雑報ヲ發行セントスル者ハ、持主若クハ社主ヨリ其ノ府県厅ヲ經由シテ願書ヲ内務省ニ捧げ允准ヲ得ベシ」とある。
- (2) 東京大學大學院法學政治學研究科附屬近代日本法政史料センターの明治新聞雑誌文庫に所藏されている。
- (3) 詩二十首のうち、「螢雪學庭志叢」第一〇二號に收められている「林和靖觀梅圖」は、明治二十年三月刊の「海內詩媒」第八十集に再録されており、既に拙稿「竹穉若年の詩詞文一集外詩詞四十九首及び佚文五篇」—で紹介したので、本文を重複して掲げることはしなかつた。

なお、「蟹雪學庭志叢」第一〇二號は明治十九年三月の刊行なので、

「海內詩媒」第八十集より一年早い。

(4) 「海內詩媒」は稀覯本で、各所蔵機関においても全号の所蔵を確認することができず、今のところその網羅的な調査は困難である。

(5) 本詩は「鬪詩」欄（市川漱村批點）応募作品で、第七席となつている。

(6) 本詩は「鬪詩」欄（市川漱村批點）応募作品で、第一席となつている。

(7) 本詩は「鬪詩」欄（市川漱村批點）応募作品で、第四席となつている。

本稿は、平成十八・十九年度科学的研究費補助金（基盤研究C）・研究課題名「日本における詞の収集と整理」（課題番号一八五二〇一一二）による研究成果の一部である。